

ビーガン(菜食主義)について

久永 美乃里

私がトーランスを訪れて最も印象に残ったのは、ビーガンという人々の存在です。私は元々、人々の考え方の差異に興味を持っていました。トーランスへ行く前まではビーガンとベジタリアンの違いさえよく分かりませんでした。ビーガンは、ベジタリアンのうち、宗教上の理由というわけではなく、動物に苦しみを与えることへの嫌悪から自分の意志で肉や魚およびそれらの副生成物、動物性の食品を一切摂らない人々を指します。

私のセカンドホストのホストシスターはビーガンでした。初めはビーガンも宗教上の理由から摂取するものを選んでいたので、ビーガンについて彼女に尋ねたときとても衝撃を受けました。彼女は食用の動物たちの福祉と肉製品を生産している畜産工場に対する懸念を持っていました。動物の倫理的扱いを求める人々が制作した畜産工場の現状ビデオを観てから彼女はビーガンになろうと決心したそうです。

私は彼女の動物愛護の精神と強い行動力に感銘を受けました。彼女の家族はビーガンではないので家族とは別の食事を摂ることになります。それでも牛乳をアーモンドミルクにしたり、バターをビーガン用のものにしたりと工夫してほぼ同じような食事を摂っていました。また、食事だけではなく化粧品や衣類などにも気を使っていました。動物テストを行っていない化粧品などを選んで使い、レザーや動物の毛を使用した衣類は身に着けていませんでした。

アメリカは日本よりもビーガンやベジタリアンが生活しやすい国だと思います。ホストファミリーにスーパーマーケットへ連れていってもらったとき、私は多様な種類のベジタリアン用の肉のようなものや、ビーガン用の乳製品を使わないチーズやバターを見てとても驚きました。日本のスーパーマーケットでは見たことがありません。また、ビーガンやベジタリアンのためのレストランも多くありました。アメリカは多くの人種、民族が共存する国だからこそ、そのニーズに応えるというのは必要不可欠であるのだと感じました。食べるものが多種多様に選択できるというのは先進国だからこそだと思います。日本では命を奪って食べさせてもらうことに対して「いただきます。」と感謝し、残さず食することが当たり前となっています。しかし、その製造過程に目を向けると、そこには「いただきます。」では済まされることの出来ない問題も生じています。

私はこのことから様々なことを考えさせられました。家族や友達と違う食生活をしたり、いちいち動物テストを行っているか、動物性のものは含まれていないかを確認したりするのは容易なことではないと思います。しかし、だからといって動物を苦しめていることを許容してよいのかということではないのではないかと思います。私には彼女のようなことは出来ないと思います。しかし少し意識することで変化を生み出すこともできます。例えば、農薬や遺伝子組み換え生物を使わないオーガニック素材や、動物のことをきちんと考えて正しいやり方で動物性食品を生産している会社の肉製品を買うことや、動物テストをしていない製品を買うなど様々なことが挙げられます。値は張ってしまうと思いますが、確かにこのままではいけないと思います。私も彼女を見習ってそういったことを意識していこうと思いました。

私はこの経験を活かして世界に対する視野を広げ、様々なことに挑戦していきたいと思います。

最後になりますが、この派遣プログラムに携わって下さった KIRA、TSCA の皆様、そして支えて下さったすべての方々に感謝しています。本当に有り難うございました。

